

煙管と刻みたばこ

日本にたばこが伝わり、国内の人々へと広く普及^{ふきゅう}して行く中、ヨーロッパのパイプや東南アジアの喫煙具^{きつえんぐ}をまねて作られたものが煙管だと考えられています。

たばこが伝わった当初は、煙管は持ち手にあたる羅宇^{らう}の部分^うが長く、70 cmを越えるものもありました。葉たばこも粗く刻まれており、たばこを詰めるための火皿^{ひざら}も大きいものでした。

粗く刻まれたいた葉たばこは、徐々に細く刻まれるようになっていきます。19世紀前半には毛髪^{もうはつ}ほどの細さになり「細刻（ほそきざ）みたばこ」と呼ばれるようになります。これは、より細かく刻むことで、日本人好みの味わいになることから生まれたといわれます。

細刻みたばこが広まると、煙管の火皿が小さくなり、大きさも携帯^{けいたい}しやすいように小型化^{こ がた か}され20～30 cmのものが主流^{しゅりゅう}となっていきます。

